

善隣

No.542 通巻809

2023年（令和5年）12月1日発行（毎月1日発行）

2023 12





自衛消防訓練の様子（2023年11月16日）

善 隣

目 次

2023年12月号

公開講演会記録

令和日本の往くべき道

一岩倉使節団の眼で考える 泉 三郎 2

『満洲国グランドホテル』を書き上げて 平山周吉 11

人間 聖徳太子 リーダーシップの神髄

一和を以て貴しと為す 高谷秀司 19

陶々俳壇 馬場由紀子 28

中国ウォッチング 編・訳 上松玲子 30

協会通信・会員だより・同好会だより 32

2023年12月の行事予定 33

—— 善 隣 第542号 通巻809号 ——

2023（令和5）年12月1日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋1-5-5
一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03（3573）3051
FAX 03（3573）1783

発行人 藤沼弘一

編集 原田克子

編集協力 朝 浩之、山谷悦子

印刷所 旬ゆにおんプレス
TEL 048-834-1201

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

みんなの写真館 32

（姜晋如、村田嘉明）

—— 。 —— 。 —— 。 ——

当協会は、中国ならびに近隣諸国
との相互理解を深め、友好親善・交
流を推進しています。

一般社団法人 国際善隣協会

公開講演会記録

令和日本の往くべき道

— 岩倉使節団の眼で考える

NPO法人「米欧亜回覧の会」理事長 泉

三郎



① 巨大変化の時代を迎えて

私は、明治初年の歴史的壮挙「岩倉使節団の米欧回覧」に出逢い、以来半世紀近く「この旅の追っかけ」をしているものです。

今日は、当会理事でもある畏友の井出亜夫氏から「岩倉使節団を素材に、令和日本の行くべき道につき何かしゃべれ」とのご下命ですので、浅学菲才を顧みず、いささか所感を述べさせていただきます。

さて、明治5年つまり1872年前

後は、世界的にも大変化の時代でありました。英国に発した産業革命が世界中に大きな渦を起こし、その大波を受けて日本も維新革命を成し遂げ西洋的近代化に舵をとった歴史的な時期でありました。それから150年、令和5年を迎えた日本は、人類史上でも未曾有の巨大変化の時代に遭遇していると思います。その第一の象徴的な事象は、次々と起こる異常気象でありその及ぼす大被害の衝撃です。この3年半に及ぶコロナパンデミックもその気候変動に起因ありとされていますが、新型コロナは現代文明社会をグローバルなス

ケールで機能不全にさせたことはご承知の通りです。

そしてもう一つの象徴的な事象が産業革命以来の著しい近代化の成果と過剰文明の出現であり、さらに画期的なことは脳に代わる精密巧緻を極めた機器「コンピューターの発明」が加わったことです。それらが引き起こした情報革命の巨大波は、人類をして「神の領域」まで侵す異次元の時代に突入させることになりました。

こうした現状に対しわれわれはいかに対処すべきか。かつて黒船の襲来という世界的大変化に遭遇し敢然として

それに対応し近代国家をつくりあげていった明治創業世代の歴史、とりわけ岩倉使節団の群像の言動や営為は、必ずや何らかの示唆と知恵を与えてくれるのではないか、と思うのであります。

② 150年前の西洋文明と日本

文明

(1) 使節団の眼に映った「西洋文明」の姿は？

まず、使節団の眼に映った「西洋文明の姿」を瞥見してみましよう。以下は、使節団の公式記録ともいうべき久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』からの引用です。

一つ目は、産業革命の先達、当時「世界の最盛を誇る英国」の回覧後の感想です。

「英ノ全国ハ黄金花ヲ結ヒ、百貨林ヲナシテ貴賤上下、悉ク皆昇平鼓腹セント、ソレ然リ豈ソレ然ランヤ、ソモソモ安楽ハ艱苦ノ結ビシ果ニテ、富貴ハ勉強ノ開シ花ナリ、英国ノ富庶世界ニ冠タルハ、ソノ人民ノ營業力(奮勵努力)他ニ超過セルニヨル、是ヲ以テ

之ヲ謂ヘハ、英国ニ住スルモノ、頃刻(しばらくの間)モ懶惰スルヲ得ス、曾テ聞ク、スペイン人ハ、終日睡ルヲ以テ業トス、又曰ク英人ノ足附ハ地ニ著止セスト」。

案内に立った駐日公使のパークスは「英国は欧州の片隅の瘦せた土地しか与えられずいかに働いても満足な産物が得られなかったので、地中から石炭と鉄を掘出して器械をつくり蒸気力で工業を興し富強をなしてきたのだ」と、気候にも恵まれ物産も豊かな日本との違いを強調し、使節は豊かで便利な暮らしを享受する英国人の姿を実見するのです。

二つ目は、当時「文明都雅の尖点」といわれたパリに関する記述です

一行はロンドンのヴィクトリア駅から列車でドーバーまで行き、海峡をフェリーボートで渡り仏の列車に乗り換えパリの東駅に着きました。そして馬車を連ねて市街に行く時の第一印象です。
「皚皚タル層閣、街ヲ挟ミテ聳ヘ、路ミナ石タタミヲシキ、樹ヲウエ、気灯ヲ点ス、月輪正ニ上リ、名都ノ風景、

自ラ人目ヲ麗シ、店店ニ綺羅ヲ陳ネ、旗亭ニ游客ノ群ル、府人ノ気風マタ、英京(ロンドン)ト趣キヲ異ニス」。

驚くべきことにパリは、ナポレオン3世とオスマン知事の見事なリーダシップの下に、約20年をかけて今日とあらかた同じくらいの素晴らしい「麗都」をつくりあげていたのです。宿は凱旋門に面する瀟洒な3階建ての迎賓館であり、窓からの眺めは「景色爽快ニシテ絵ノ如シ」でした。市中を回覧すれば「往クトコロミナ遊息ノ勝地アリ、街上ノ行ク人モマタ其ノ歩忙シカラズ、空氣清朗ニシテ、煤煙少ナク薪ヲ以テ石炭ニカエ、……」とあります。ロンドンではスモッグの中を車馬喧噪し人々は足が地につかないほど忙しげに歩いていたのと実に対照的です。パリの街は、訪ねた日々がクリスマスの時期だったこともあり、とりわけシャンゼリゼ界隈はガス灯が玉を連ねたように輝き、音楽堂には楽師がそろって軽快な音楽を奏し、人々は抱き合って楽しげに踊っていました。ルノワールのムーラン・ド・ラ・ギャレットの絵そのままの風景が展開していたのです。

久米はその仏国の美的な豊かさに目を見はり、「文明が進むとは、食、衣、住の順序で豊かさが進み、求める重点が量より質に変化する、より贅沢に美的になっていく」といい、「パリは天国のようだ」と感嘆しました。そして、「倫敦（ロンドン）ニアレハ人ヲシテ勉強セシム、巴黎（パリ）ニアレハ人ヲシテ愉悅セシム」と書き、英仏の文明の成熟度の違いを鮮やかに描き分けています。

三つ目は、『回覧実記』の第五編にある「欧羅巴洲政俗総論」において東西文明の比較を行っている箇所です。久米はズバリ「白種ハ欲深キ人種ナリ、黄種ハ欲少キ人種ナリ」であると断言します。個々人は「私利ヲ営求スル一意ニテ、生業ニ勉強シ十分ニ遂ゲン事ヲ必ス」とあり、国家の目指すところも利益とその保護を大事にする「町人国家」である、といます。それに比べ日本は「利益を追求するのは下位の目標であり人格陶冶をこそ上位に置く」「道義国家」である、という認識なのです。岩倉使節団のメンバーが文明度の仰ぎ見るような格差にもめげず、意外な

ほど「堂々としていた」のは、「徳義」を大事にする日本国の方が町人国家より高尚だとする自負があったからだと推察されます。

（2）欧米人の目に映った、幕末維新期の日本文明

翻って維新前後の日本はどんな文明だったのでしょうか、幕末や明治期に訪れた欧米人の目にどう映ったか。いくつかの例を渡辺京二氏の『逝きし世の面影』から引用させてもらいましょう。

1856（安政3）年米国の初代領事ハリスは伊豆の下田に駐在し、その界隈の風景をこう描写しています。

「人々は楽しく暮らしており、食べたいだけは食べ、着物にも困ってはいない。それに家屋は清潔で、日当たりもよくて気持がよい。世界のいかなる地方においても、労働者の社会で下田におけるよりよい生活を送っているところはあまい」。

ハリスは世界各地を歩き回っている商人の出であり、南国下田界隈の暮らしぶりをそのように観察したのでした。

1872（明治5）年法律顧問とし

て4年間在日したフランスのブスケは、日本人の生活を見て「必要なものは持つが、余計なものを得ようとは思わない。（仕事のあいまにも）たばこをふかし、しゃべったり、笑ったりしている。一家を支えるにはほんの僅かし（金は）いない」のだと診断しました。

1877（明治10）年に東京を訪れた米国の生物学者E・S・モースは、「錠をかけぬ部屋の机の上に、私は小銭を置いたままにするのだが、日本人の子供や召使いは一日に数十回出入りしても、触ってならぬ物には決して手を触れぬ」といい「隅田川の川開きを見にゆくと、行き交う舟で大混雑しているにもかかわらず、「荒々しい言葉や叱責は一向聞こえず」、耳にするのは「アリガトウ」と「ゴメンナサイ」の声だけ」だといい、このような優雅と温厚の態度は「下流に属する労働者たちの正直、節儉、清潔その他」を表し、「わが国のキリスト教徒的と呼ばれるべき道徳」をすでに身に着けている証しだとして感嘆しています。

1889（明治22）年来日した英国

の詩人、エドウィン・アーノルドは上野の精養軒で開かれた歓迎晩餐会でこう述べています……「景色は妖精のように優美で、美術は絶妙であり、その魅力的な態度、礼儀正しさは、謙譲であるが卑屈に墮することはなく、天國あるいは極楽」にもっとも近づいている国である」と。

そして会場のゲストたちにこう語りかけました。

「あなた方の文明は、隔離されたアジア的生活の落ち着いた雰囲気の中で育ってきた文明であり、競い合う諸国家の衝突と騒動のただ中に住む我々に対して、命をよみがえらせるようなやすらぎと満足を授けてくれる美しい特質をはぐくんできたのです」と（太字は筆者）。かなり褒めすぎのようですが、このような感想を述べるには、それ相応の現実があったのだと思います。

では、150年後の令和日本の文明はどうなったのでしょうか……。

③ 令和の日本文明、その現況は？

（1）モアモア文明の果て、「溢れかえる豊かさと便利さ」

久米邦武が令和5年の日本を訪ねたとしたら、どう感じ、どう思うでしょうか。

現代日本の姿は、西洋近代の文明が巨樹の如くバベルの塔のように聳え立っているように見えるかもしれません。

大樹は無数に大小の枝葉を伸ばし、そこには爛漫と花が咲き、見事な果実が鈴なりになっています。都市の景観はすっかり欧米化し、街を往く人々もすっかり西洋化しました。とくに若い人たち、戦後の教育を受けた世代は、アメリカ文明の影響に色濃く染まり、容姿、言葉遣い、考え方もすっかり米国風となり、個人の欲望追及に「一意専心」し、あからさまに「快楽を求めて」恥じることはありません。久米は、その経済的、物質的、外面的繁栄に驚嘆すると同時に、精神的、心情的、内面的な劣化、日本の美風、礼節の欠如、道義の低下にさぞ落胆するであらましよう。

顧みれば、明治日本は、あからさまな弱肉強食の帝国主義時代にありまし

た。明治日本にあっては「独立」の確保が最優先の課題であり、使節団の面々はその学習結果を踏まえひたすら富国強兵策に挺身し、約40年で大国ロシアの南下政策を阻み、幕末以来の宿痾ともいべき不平等条約の改正にも成功し「独立」を全うしました。

その後の40年はどうでしょうか。前半の20年は欧州戦争で漁夫の利を得たこともあり民の生活もようやく潤い文化も享受できるよき時代を迎えました。しかし、それは長続きせず、後半の20年では三代目の属性ともいうべき自惚れや怠惰、身のほど知らずの野心にとられ、現実を直視することを忘れました。そして無謀な戦争を仕掛け、その果てに超大国の米国とも戦う破目になり、亡国寸前の大敗北を喫したことはご周知の通りです。

そして米国の占領下、GHQの絶対権力の下で未曾有の大改革がなされ、軍事を捨てて経済産業の発展に一途に邁進しました。そして40年、日本人は実によく頑張りました。そして奇跡的といわれる経済成長を遂げて、人々の

生活はすっかり豊かになり、すっかり便利になりました。1985年、日本はその繁栄の頂点にありました。鉄と自動車の生産は世界一となり、輸金額は絶好調で対外債権の所有国としてもトップに躍り出ました。富の配分も概して公正で中産階級が厚く消費力は旺盛で一般の民も「豊かで便利な生活」を享受できるようになりました。それは明治維新以来求め続けてきた「平和と民富の国」を実現できたことを意味しました。

思い起こせば1867年、英国の経済学者スタンレー・ジェボンズは、英国の繁栄ぶりを次のように表現しました。「石炭と鉄の基礎の上に建てられた豊かなイギリスの商業は、世界の国を相手にしている。北アメリカとロシアは我々の穀物畑であり、シカゴとオデッサは我々の穀倉である。カナダとバルト海沿岸地方は我々の森林であり、オーストラリアは我々の綿羊牧場であり、南アメリカは我々の牧牛場である。ペルーの銀、カリフォルニア、オーストラリアの金は、こぞってロンドンに

流入する。中国人は我々のために茶を栽培し、コーヒー、砂糖、香料は東インドの栽培地からやってくる。スペインやフランスは我々の葡萄畑であり、地中海沿岸は我々の果樹園である」と。1987年、奇しくも120年後、ある日本人はその繁栄ぶりをこう書きました。

「今や日本は世界を相手にしている。アメリカは我々の穀物畑であり、オーストラリアは我々の鉄鉱山であり牧羊場である。カナダは我々の森林であり、ペルシヤ湾岸諸国は我々の油田である。ブラジルは我々のためにコーヒーを栽培し、台湾は我々のためにバナナをつくり、世界の海は我々の漁場である。そして、パリ、ローマは言うに及ばず、エジプトのピラミッド、中国の万里の長城も世界の名所旧跡はことごとく我々の観光地である」と。

しかし、日本経済はそれが頂点であり、その後は金融バブルが続きそれが破裂して、以後は国もまるごと借金依存のローン体質となり、お気楽な「3代目的ユーフォリア生活」を続けて30

年が過ぎようとしています。

その光景は、コンビニやショッピングモール、百貨店を一覧すれば一目瞭然です。食品をはじめ、衣料、家具、什器、実用品から贅沢品まで溢れるように並んでいます。そして各家庭、各個人の暮らしを見れば、最新型のテレビやスマホから奔流のようにあらゆる情報が間断なく放出されています。そしてお笑いや歌謡番組、スポーツや旅、それに金融商品や健康・美容関連商品などのコマーシャルの氾濫、あってもなくてもいいような商品やその宣伝の洪水でアップアップの日々が繰り返されています。

(2) 度が過ぎると、モノみな悪になる

しかし、あまりに豊かになり、あまりに便利になると、ある時機を境に効用はマイナスに転じてしまいます。人体に例えれば、過食・過飲になるとそれがぜい肉となり肥満となり臓器の負担になって諸病の元になる道理です。ご覧ください。街も住まいも、文明の果実、グルメ、ファッション、各種の贅沢品、そして諸々の便利な文明の利器・

雑器類でどこもいっぱいです。30年も前、我々戦前生まれの世代は、「もう必要なものはそろったね、これ以上ほしいものはないな……」とつぶやいたものですが、その後も世の中は、「モアモア進歩、モアモア成長」を唱えて「これでもか、これでもか」と新商品や新サービスの制作に精を出し、しきりに忙しがって暮らしてきたのです。

その末に、現代人はストレスがたまり心身ともに不健康になる……「おっかれ」と「いやし」が日々の挨拶となりました。「忙」とは「心を亡くす」と書きます。人間は本来もっていた大切なものを亡くし生来備わっている能力や感性さえ劣化させてしまうのです。フランスの生理医学者でノーベル賞受賞のアレクシス・カレルは、こう言いました。「人間は、もう現代の文明についていくことはできないし、文明が進めば進むほど人間は退化していく。であれば、文明が果たして人間を幸福にしているのか、不幸にしているのか、はっきり見極める必要がある」と。

④ モアモアから適適へー知足適欲・ほどよい加減

では、文明とは何か。近代化とは何か。明治より150年、戦後だけでも77年……我々がずっと目指してきたものは何なのか。「迷ったら原点に返れ」と言います。ならば源流に回帰してゼロベースで考えてみましょう。

(1) 文明は何のため？ すべて幸福のための道具ではないのか

科学技術文明、資本主義文明、その進歩・発展は、目的ですか？

美術や音楽などの文化、キリスト教や仏教などの宗教は、どうですか？

いずれも、目的ではありませんね。

どれもこれも道具・方便であって目的ではない。目に見えるハードなもの（文明？）、目に見えないソフトなもの（文化？）、大きなものも小さなものも、すべては幸福のためのもの、人為人工のものです。それらはすべて自然にあったものではない、人間が創り出したものです。文明はものすごく

進歩発展して目もくらむばかりに巨大で膨大になりましたが、それは主人ではなく、人間の道具、召し使いでしかない、最新流行のAIもしく、単純に道具でしかないので。

(2) 「幸福とは何か」、たった五つあればいい

では、目的の幸福とはいったい何か。古今東西、多くの人がいえること、言っています。しかし、真実はごくシンプルなものではない。突きつめていくと、「幸福には五つの要件があればいい」ことが判然としました。

典拠は二つあります。一つはもっとも長い歴史をもつ中国の知恵（『書経』）であり「五福」という考え方です。長寿、富裕、健康、徳を好むこと、天命を全うすること、の五つです。もう一つの典拠は、最新の超大国米国の知恵、つまり「データ」からの抽出ですが、いかにも米国らしいですね。代表的調査会社であるギャラップの膨大なアンケートの結果（well being のデータ）から五つに集約されたものです。情熱をもてる仕事、好ましい人間関係、安定した所

得、健康、地域社会への貢献……です。

この二つは、いずれも5項目、表現は違いますが中身はほとんど同じだと思えます。同じ人間なので当然といえば当然です。私はその5項目に少し手をいれて次の五つにまとめてみました。

それは、仕事、家族・仲間、日々の生活、健康、お金の五つ、です。この中で異色なのは日々の生活かもしれませんが。その典拠は中国生まれの米国の文明批評家林語堂^{リンユータン}の「The Importance of Living」(坂本勝訳『いかに良く生きるか』)です。

いずれもごく常識的なことでありシンプルです。余計なものはいらないのです。

(3)「適適」こそ、幸福へのマスターキーではないのか？

さて、問題はこの超過剰文明時代に、いかにして幸福をつかみ取るか、です。物や情報が氾濫する中で何を基準に選んだらいいのかわからなくなっているからです。そこで「モアモア」に代わって思いついたのが「適適」というフレー

ズです。漢和辞典を引くと、「適」の1字からはゾロゾロと熟語が出てきます。

中でももっともわかりやすいのは「適量」でしょう。毒も適量飲めば薬になり、薬も過剰に飲めば毒になります。匙加減一つで善にも悪にもなる。温度もそうですね、いい湯だと言えるのはよい加減の温度です。運動も適度にやれば健康によく、過ぎれば体をこわす。「適性」もわかりやすいですね。相性のよさは極めて大事です、恋人や伴侶選びはむろん、人付き合い全般に通じます。仕事や趣味のケースも同じです。その調子で挙げていくと……。

適材適所、適時適量、適用適中、適当適切、適心適意、適正適格、適性適合、適宜適度……、適応範囲はまことに広い。

しかし、その中でも特に重要な「適」があります、「適欲」です。モアモア文明の過度の進展は、人類史上に比類なき過欲を生みました。それは貪欲であり、資産や所得の大格差であり、今や世界的に最緊要の課題となっています。その不満が怨恨、憤懣、怒りを生

み、テロ、暴動、争乱、戦争を惹起させるからです。今こそ「貪欲から適欲へ」、「GDP(量)からQOL(質)へ」、そして「生産から分配へ」「モアモアから適適へ」、個々人の価値基準や社会のパラダイムを大転換をすべき時に来ていると思うのです。

⑤ 日本文明の歴史には、「新たな地球文明」に最適な「知恵」がある

(1) 徳川文明の長所(エッセンス)を現代文明に注入すべし

徳川文明には厳格な身分制や鎖国など各種の短所もありましたが、少なくとも二つの長所がありました。一つは、先述したような個々人の生き方として、余計なものは求めない、腹八分目の、身分相応の「知足適欲」の考えが浸透していたことです。二つは、社会の規範として協調融和主義をとり闘争征服主義はとらなかったことです。

それは大自然に対しても同様で、西洋文明のように挑戦的に自然を征服しようとは考えませんでした。自然に順応

し謙虚に生きようとなりました。幕末の蘭学の拠点は二つありました。東は佐倉の「順天堂」であり、西は大阪の「適塾」です。佐藤泰然は「天に順う」という意味で「順天」を掲げ、緒方洪庵は「適適」の意味でこれを掲げました。

それに比べ西洋発の近代文明は、天をも征服し、トコトン追及してやまない主義です。そこで進歩や成長一本やりとなり、森林や各種資源の収奪が過ぎ、膨大なごみをまき散らし、地球そのものが悲鳴をあげるまでになりました。

ロケット博士といわれた糸川英夫さんは、数十年前も前にこう言いました。

「かつて人間は宗教の束縛によって精神の自由を奪われていたが、現在人類は再び自らのつくった呪縛によって危機に瀕している。その呪縛とは何か。テクノエコノミーという価値観である」と。

現代社会に住んでいる人は、中世と違って宗教の支配からまったく解放されたれ、「自由の世界」を遊泳していると錯覚しています。が、実は「技術と経済」という現代の宗教の信者になってしまったのではないですか。技術への信仰、

経済への信仰、これが手をつないで人間をふりまわし、豊かに便利にはしてくれましたが、一方で母なる自然を破壊し地球の微妙なバランスを崩し、人間性そのものを劣化させ機械化しているのではないですか。今こそ、テクノエコノミーという怪物、疑似宗教「技術の進歩と経済の発展」という呪縛から自らを解放しなくてはなりません。

ところで、明治初年の人々は「文明」をどう考えたのか、振り返ってみましょう。福沢諭吉は「文明とは衣食を豊かにし、人品を高尚にすること」だといいました。

西郷隆盛は「文明とは道の普く行われることであって、宮室の莊嚴、衣服の美麗、外観の浮華をいうにあらず」といい、「敬天愛人」を唱えました。

豊かさの他に福沢は「人品の高尚」を挙げ、西郷は豊かさより「人間としての道」を求めました。人品とは人としての品格、道とは人の道、道義・道徳のことです。

徳川文明は、東海の孤島に育まれた

文明でした。それは限界社会であり、その中で生きる知恵として自然を崇敬し人の和を大事にしました。そして経済面では生産と消費の循環を尊び、治安については当時最新兵器であった鉄砲を捨て刀の時代に戻りました。そして260年の平和な生活を享受したのです。

現代の地球は交通通信機関の驚異的な発達により地球そのものが小さい限界社会となりました。今や人類はひとしく「宇宙船地球号の客」であることをはっきりと認識すべきです。そして徳川文明の知恵から学ぶべき時だと思っています。

日本には明治以来今日まで、その伝統が伏流しています。渋沢栄一は『論語』を、稲盛和夫は「利他主義」を、原丈人は「公益」を経済の上に置きました。いずれも西洋的貪欲の闘争主義から東洋的適欲の融和主義への道です。人類の生きる道はそれしかないと覚悟すべきでありましょう。そして日本はその先頭に立ってこの思想を主唱し、主導すべき位置にあるのではないか、

というのが私の直観です。

(2) 地球文明の夢、「天地人和楽」の世界

さて、日本にはその思想をもっとわかりやすく説いた人物がいました。

元禄時代を生きた思想家、『楽訓』や『養生訓』で著名な貝原益軒です。

その益軒先生は、「天地和楽」と言いました。「天地」とは「大自然」というべきでしょう。横文字でいえば「グレートネイチャー」でしょうか。科学技術がいくら進歩しても、天地にあるものはなお不思議だらけです。人体一つとってみても、60兆ともいわれる細胞からできていて、それぞれが複雑に機能分担しながら、実に巧妙に精緻に生命を維持しているのです。

それを創り出し差配しているのは誰ですか。古来、人はそれを「神」といい、「天」といい、「サムシンググレート」とも呼んでいますね。その偉大なる創造主を敬い謙虚にその知恵から学ぶことがもっとも大事なことはありませんか。それを「天と地と和み楽しむ」と表現したところに益軒先生の深

遠な叡知があると思います。私はそこに人も加えて「天地人和楽」としてみました。現代の「SDGsの思想」にも通じますが、日本語版とすればより簡潔でわかりやすいと思いませんか。

ここまで文明の大樹が育ち、未曾有の豊かさを実現できた現代では、配分さえ適正にすれば、かつてのような、奪い合い、争い合い、殺し合うことはなくて済むのではないのでしょうか。今こそ、「天と地と人」が、互いに和み合い楽しみ合う「妙境」へ、互いに響き合う「交響の世界」へ進むべき好機だと思っています。

久米邦武は晩年、東西文明を比較考量して「超然とこの一球世界」に通じる「一視同仁の博愛」や「宇宙・生命」のような価値観を模索していました。それは「天地人和楽」の思想に通じるものではないかと思えます。

岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文らも、同じように考えたのではないのでしょうか。確かに150年前、西洋の技術産業文明は積極的に摂取しようとした。が、一方では一神教

のキリスト教や利益追求一辺倒の思想に拒否反応を示し、八百万の神を認め、仁愛を尊ぶ「日本の美風」をこそ懸命に保守しようとした。

令和の日本は、この人間蘇生の大事業、「新たなルネッサンス」を立言リードして、このかけがえのない青い地球が「天地人和楽の妙境」になる日を、身を挺して希求すべきではないでしょうか。私はナイーブな少年のようですが、みなさんのお考えはいかがでしょうか。

(2023年6月29日・公開講演会)

筆者略歴(いずみ・さぶろう)

著述家、岩倉使節団の研究者、NPO法人「米欧亜回覧の会」理事長。

1935年生まれ、一橋大学経済学部卒(坂本二郎ゼミ)。

著書に『堂々たる日本人』『岩倉使節団』『岩倉使節団という冒険』『伊藤博文の青年時代』『青年・渋沢栄一の欧州体験』など。編著に『岩倉使節団の群像——日本近代化のパイオニア』。

著書に『堂々たる日本人』『岩倉使節団』『岩倉使節団という冒険』『伊藤博文の青年時代』『青年・渋沢栄一の欧州体験』など。編著に『岩倉使節団の群像——日本近代化のパイオニア』。

公開講演会記録

『満洲国グランドホテル』を
書き上げて

雑文家 平山周吉



昨年（2022年）『満洲国グランドホテル』（芸術新聞社）という本を出しました。おかげさまで司馬遼太郎賞を頂戴するという幸運に恵まれた本です。本来でしたら、執筆を開始する前に、こちらの国際善隣協会にある本や資料を拝見させてもらっていたら、相当、効率よくできたんじゃないかなと、残念に思っています。

『満洲国グランドホテル』は全部で三十六回ありまして、一応、各回ごとに主人公を立て、三十六人の満洲国に関わりのあった人を一回ごとの主人公にして、それぞれの見た満洲国を調

べ、三十六人の人生を重ね合わせて総合していくと、今まで語られてきた満洲とは違う満洲が見えてくるのではと思って始めました。満洲というと、どうしても満洲事変から建国までの時期か、敗戦と崩壊の時期かが歴史として語られてしまいますから。

表紙カバーは、安彦良和さんに描いてもらいました。安彦さんは満洲を舞台にした漫画『虹色のトロツキー』の作者であることは言うまでもありません。表紙カバーの真ん中には満洲国の国旗と日本の日の丸が並び、その周りに九人の人が描かれています。普通

に考えると、この九人みんなが、その三十六人の中に全部入っているだろうと思われるでしょうが、実は三十六人に選ばれていない人も安彦さんにお願ひして、描いてもらいました。ぜひこの人の顔は入れたいんで描いてくださいと頼み、入れてもらいました。羊頭狗肉もいいところですが。

上から時計回りで、李香蘭（山口淑子）、石原莞爾、原節子、古海忠之、河本大作、松岡洋右、岸信介、甘粕正彦、小林秀雄、となっています。『満洲国グランドホテル』で主人公となっているのは、このうちでは四人しかい

ません。李香蘭、石原、河本、岸、甘粕の五人は脇役としては登場しても、主役は張っていません。満洲の歴史では「ニキ三スケ」（東条英機、星野直樹、松岡洋右、岸信介、鮎川義介）が有名ですが、その中では星野と松岡は三十六人の中に入れました。三十六人には入らず、表紙の九人に入っている中では、甘粕正彦と河本大作がいます。本の中では勝手に「一ヒコーサク」と名づけてしまいました。この二人は考えようによっては、「ニキ三スケ」よりも重要な人物といえるでしょう。三十六人にこそ入っていませんが、『満洲国グランドホテル』では、あちこちに登場しています。

肝心の三十六人を、一応、職業別に分類してみました。そうすると、今までの満洲についての本とはかなり違って、いることが一目瞭然になってきます。一番多かったのが、満洲国の官僚だった人で八人と、相当多い。その次には、新聞記者その他のジャーナリストで六人。次は、陸軍の軍人で五人ですね。それから、満鉄という分類で同

じく五人。作家・評論家が四人、映画関係者が四人。残りは、少年二人、学者一人、主婦一人という分類になりました。

自分なりに、満洲国を語る上で重要なのは官僚なんじゃないかなと思っています。陸軍の軍人も、実情は陸軍の官僚なわけですから、それも入れちゃいますと、官僚は合わせて十三人になっちゃうんですね。政治家がない国家で、関東軍と官僚がやってた国家なんで、当然と言えば当然なんですけど。官僚は普通の読者には馴染みが薄い人が多いのですが、あえてクローズアップしています。

ジャーナリストが六人もいるのは、これは、僕がもともとジャーナリストの書いたもの、あるいは回想したものを読んでいるせいもあります。同時代を記録するという意識が職業的習性としてあるので、いろんな記録をし、記憶をしている。あの当時は書けなかった裏話をたくさん持っているというので、ジャーナリストを入り口にしていくと、満洲国の実情に近づきやす

いなということがあったので、意図的にジャーナリストを多く取り上げようとは、当初から思っていました。

ここに今年の三月に出た『未墾地に入植した満蒙開拓団長の記録』（文学通信）という本を持ってきました。サブタイトルが「堀忠雄『五福堂開拓団十年記』を読む」とあります。新潟県の開拓団で、五福堂開拓団というのがあって、団長だった山形県出身の堀忠雄という人が残した記録を、研究者が読み解いたものです。開拓団の人たちは敗戦後に悲惨な目に合うわけですけど、この五福堂開拓団は例外的に敗戦時の混乱の中でも悲惨な目に合わずに済んだという、幸運に恵まれた開拓団です。なぜそういう幸運に恵まれたかということも含めて書いてある。

この五福堂開拓団は昭和十五（一九四〇）年の日活映画『沃土萬里』（倉田文人監督、江川宇礼雄、風見章子主演）のロケ地になったとこの本に書かれていたのにはビックリしました。この『沃土萬里』を僕はたまたま見えます。昭和五十二（一九七七）年の秋

に京橋のフィルムセンター（現、国立映画アーカイブ）で上映されました。映画に撮られた満洲の風景がすごく強烈な印象に残っていて、この映画をもう一度見たいとずっと思ってきたんですが、見る機会がないままに四十数年経っちゃった。昭和五十二年に、僕が満洲にある程度興味を持ったのは、この映画を見たのがひとつと、この年には、今は亡き旺文社文庫で、地味なユーモア作家・木山捷平の『大陸の細道』（現在は小学館P+D BOOKS）が出ました。『大陸の細道』は昭和十九（一九四四）年に内地で食い詰めて満洲に流れていき、敗戦前に召集されて苦労する話を小説仕立てにした、私小説なんです。『沃土萬里』という映画と、『大陸の細道』という小説、この二つとの出会いが、何十年もたってから『満洲国グランドホテル』を書くことにつながっていたんだと、最近気づきました。

昭和五十二年に、僕は文藝春秋というところに勤めていて、当時は『週刊文春』編集部の下っ端の記者でした。

仕事が嫌だったもので、小説や映画のほうに惹かれていました。この年の月刊『文藝春秋』に載った記事も私の満洲への関心を掻き立てるのに役割を果たしてくれたと思います。七月号に載った「危機の宰相」というノンフィクションと、十一月号に載った「満洲の妖怪」というタイトルの岸信介研究レポートでした。

「危機の宰相」は沢木耕太郎さんが二十九歳の時の作品です。本になるのはずっと後ですし（現在は文春文庫）、沢木さんのさわやかなイメージともかけ離れたもので、池田勇人と彼を支えた「敗者」たちの話です。池田首相の大蔵省時代の友人だった田村敏雄という人物がいます。田村は大蔵省から満洲へと派遣された役人の一人で、シベリア抑留から帰国後、池田の政治団体「宏池会」の事務局長になりました。この人のことがずっと気になっていたので、『満洲国グランドホテル』では第十二回的主人公として取り上げました。

「満洲の妖怪」はタイトルがショッ

キングですが、商工省の役人から満洲に出向した岸信介の満洲時代を調べ上げた調査報道の大型ノンフィクションでした。ここには、満洲国官僚が作った満洲国のシステムというのを岸信介が戦後に持ち込んだということを相当具体的に書かれています。当時は戦後三十年がたっていましたが、満洲についての証言者は健在でしたので、チーム取材によって、たくさん新しい話を紹介していました。この二つのノンフィクションとの出会いも昭和五十二年でした。

『満洲国グランドホテル』は出版された後に、ずいぶん取材を受けました。取材の方々が読んでいて印象に残った人としてよく挙げた名前が二つあります。小坂正則（第四回的主人公）と内村剛介（第三十三回的主人公）です。小坂は回想録『もう一つの昭和史・男たちの靴音——私の異色人脈簿』（尚友倶楽部）を書いた元新聞記者、内村はハルビン学院を卒業した後、関東軍で通訳をやっていて、戦後十一年間シベリアに抑留され、『生き

急ぐ——『スターリン獄の日本人』を書きました。

小坂正則という人は、歴史的には名前を残していない人です。「満洲の廊下トンビ」を自称していて、岡山の旧制中学校を出た後に、満洲に流れていて、新聞記者をやりながら、警察の仕事もするという、ちょっと、いかがわしい存在なところからスタートして、だんだん新聞記者として頭角をあらわし、満洲国の著名人に食い込む。星野直樹のような官僚にも食い込むし、張作霖爆殺の張本人である河本大作のような、満洲の中で隠然とした実力者で、満鉄の理事をやったり、経営者にもなっている、そういう人にもどんどん食い込んで情報を取ってきた。そうした秘話をたくさん書いているんですね。多分この本が満洲の歴史の記述に使われたことはあまりないと思う。内容というところ、ヤバイことが書いてある。ヤバイっていうのは、お金のことであるとか、満洲の夜の世界で、男たちがどんな遊び方をしていたかとか、裏にはどんな人脈があったとか。機密

費がどうなっていたかでは、自分が誰それから、これだけの機密費をもらっていたということまで、アケスケに書いています。あるいは、機密費じゃなくて囑託みたいな形で自分がいろんな人からお金をもらったとか、そういう普通だと表に残さないような話も書いてるんですね。そういう意味で言うところ、非常に貴重なものなんです。僕は、この本を読んで、『満洲国グランドホテル』が書けるかなと思ったくらいです。で、ただ心配なのは、どこまで信じていいのか。この本は、一般社団法人尚友俱樂部常務理事である阪谷芳直さんのようなきちっとした人が本にして残そうとしたのだから、間違いないでしょうが、やはり、どこまで信じていいか心配でした。

考えてみると、『文藝春秋』に載った「満洲の妖怪」に、小坂正則は証言者として出ていたんですね。で、その取材グループの一人に、塩田潮さんという政治ジャーナリストがいました。塩田さんとは知り合いだったので、ひょっとして塩田さんが小坂正則に

会って取材したのではないかなと、ふと思い、塩田さんに電話をしてみました。そうしたら、何度も会って話を聞いたと言うんですね。当時の取材原稿がまだ家の中にあるはずだから、ちょっと探してみますよと言ってくださった。そうしたら塩田さんの家から当時の取材原稿が、ごそっと出てきたのですよ。二百字詰め原稿用紙で四百枚ぐらいある。普通の単行本一冊分ぐらい。その取材原稿をポンと渡された。これには感激しました。この本でも引用をしています。塩田さんは二十人ぐらいの満洲国関係者から話を聞いていました。読んでいますと、もう、四十数年前の取材ですが、一問一答の形で書いてあるので、皆さん、生けるが如くに喋ってる。生けるが如く——当時生きてらしたのだから当たり前なんですけど、生けるが如くに再現されていて。こんなに四十数年前の取材原稿がきちんと残されているのかと感心したんです。中でも、小坂正則は何でも取材に応じていて、何度も話をしていくことも知りました。当時の

取材原稿を見て、この人の証言がある程度、信頼していいと、大丈夫だと思ったので、本の中では相当思い切って小坂正則の本からエピソードを拾っています。ですから、本を書く上では、アンチョコにしたというか、持参した小坂正則の本には、ご覧のように付箋がいっぱい貼ってありますけど、いっぱい引用しちゃったということなんですよね。

小坂正則はむしろ例外的な人物です。小坂は戦後には「大蔵省の廊下トンビ」になったそうです。大蔵省というと、『満洲国グランドホテル』では四人を取り上げました。「平和の義勇軍」と新聞には囃し立てられて、日本を出発した。高級官僚で向こうに行った人は、やはりいわゆる官僚には収まりきれないタイプが多かったのではないかと思います。大蔵省出身の人たちを見ると、大蔵省の中で誰を満洲に送り込むかっていうときに、あ、こいつだったなら満洲行けって言うとか、なんか行っちゃいそうだっていう人が選ばれるんですね。それは本を書いて

いてよくわかりますよ。なんかやっぱ満洲に行く人というか——行かされたって言っても微妙なんですけど——その人たちには、ある気質みたいなものがあるのではないか。日本の役所の前例踏襲の世界と必ずしもマッチしない。大蔵省に入省はしたけれど、ちょっと肌合いが違うかなみたいな人が、満洲国に勧誘されるわけです。

僕は、大蔵省の中では古海忠之という人のファンになりました。古海は戦後十八年間も抑留される。で、この人は、大蔵省から派遣されて、最終的には、官僚としてはナンバーツーですから、責任をずっと負わされて仕事をしてきた。懲役十八年の刑で、昭和三十八（一九六三）年まで中国の監獄にいた。この人は、学生時代は野球の名選手でした。旧制三高と東京帝大の野球部の選手なんですね。満洲に行っても野球をやって、役人をやりながら野球のチームを監督として率いていた。勤務時間中に野球場にいるのが許されていた。そんないい加減なことは多分満洲だから許容されたのでしょうか。い

くらなんでも東京の役所にいたら許されないと思う。そういう人なんですけど、この人が一番おかしいのは、大蔵省に入省は決まったが、高等文官の試験にまだ受かってなくて、受験勉強を急いでやろうっていうんで、日光の宿屋で勉強します。その時にすごい酔っ払い客と意気投合して、仲良くなっちゃうんです。めんどくさい酔っ払いと意気投合して、毎晩、お酒を酌み交わす。昼間は勉強してると思うんですけど、夜になると、酒を酌み交わす。タチの悪い酔っ払いなんです。普通、こんな酔っ払いと受験生は付き合わないと思うんですけど、付き合っちゃうんですね。で、この付き合っていた酔っ払いは誰かっていうと、これが葛西善蔵という、私小説作家です。文壇でも有名な酔っ払いで、貧乏ときている。そんな文士と、大蔵省に入ろうという帝大生が親しむなんて、普通あり得ないです。やっぱそういう感覚の人が大蔵省の中でも満洲に行くんだなと。

日光でその時、一緒に勉強してた、

もう一人の人間が、やはり同級生で、難波経一という人で、『満洲国グランドホテル』では第十五回の主人公です。難波経一はラグビーの選手として有名な人、やたら体のかい人で、この人は何で大蔵省からスカウトされたかというところ、満洲国では阿片を取り扱わなくちゃいけない。国の予算の中に、阿片の専売という仕事があり、この危険な仕事を任せられる大蔵省の人間、誰かいないかっていうんで、じゃあ、こいつしかいないだろうというふうな、衆目の一致するところとなって選ばれるのが、難波経一という人なんです。難波経一は、どうも相当やり手というか、満洲国でやりすぎちゃったんで、早めに満洲でも民間に出される。その代わりに早めに民間に行ってたんで、昭和十八（一九四三）年に、今度は日本の商工省に引っ張られて、商工省で役人に舞い戻ったりするんです。どっちにしても、相当型破りな人たちが行ってるんですね。で、そういう人たちが、満洲の国の風土っていうのを作っているんですね。

内務省の出身者ですと、武部六蔵と大達茂雄の二人を取り上げました。武部六蔵という人は、昭和十五（一九四〇）年、陸軍大将の梅津美治郎が関東軍司令官になった時に、引っ張られて、満洲国の総務長官となり、終戦までずっといて、その後苦労するんですけど。この人は非常に普通の役人なんです。日記が残ってまして、『武部六蔵日記』（芙蓉書房出版）という本になっています。日記といっても、総務長官時代の数年間の日記ではなく、その前に満洲に勤務していた時代の日記ではありますが。総務長官時代の日記はあの混乱の中でなくなっちゃったんでしょう。出てくると面白いなと思うんですが、中国のどこかの檔案館みたいところに眠ってんじゃないでしょうか。もし発見されたら、ぜひとも読みたい日記です。

本になった時代の日記は、日本大学の古川隆久先生が武部の息子さんたちと一緒に翻刻しています。武部は存在としては地味なんでしょうけど、モノや人間をよく見ている人で、内務省で順

調に出世していくタイプなのでしょう。性格はおとなしめで、顔も目立たない。存在感の薄い感じなんです。ね。当時の満洲国の雑誌を見ても、こんどの武部新長官は前任者の星野直樹長官に比べると物足りないなみたいな感じの下馬評で書かれています。その通りの人なんですけれど、でもなかなか、やはり見るころは見ている人。

この人は家族を大事にする人で、奥さんと子どもたちを、新京の新居に呼び寄せて暮らしています。岸信介ですと単身赴任で、満洲では夜の街でなかなか豪快にやってる感じがした。武部六蔵はそうではなくて、満洲に家族を呼び寄せる。ところが満洲では、毎日毎日宴会があるんですね。日記を見ると、もう疲れ切っちゃっている、毎晩仕事として飲まなくちゃいけない。満洲国政府だけでなく、交渉相手の関東軍とか関東局とか、いろいろあるわけですね。お互いが横の連絡を取り合いながら酒を飲んで、そこで決めたりとかするんで、そういう宴会にずっと出たりして、嫌だなんていう感じを、

珍しく日記に書いています。

僕は武部六蔵について、いろいろ調べてみて、一番調べてよかったなと思ったのは東京裁判のことでした。この人は、ソ連に抑留されてる時に、証人としてソ連から呼ばれる。陸軍の瀨島龍三もその時に呼ばれるんですけど。武部は官僚のトップなので東京裁判に呼び出される。その時にはもう、体調すごく悪いんです。東京裁判に呼ばれて一時帰国でき、家族にも再会できたりするんですけども。

その東京裁判の速記録で、武部六蔵がどんな証言したのかと調べてみました。速記録は小さな文字で四段組で組まれている。淡々と答えているだけですが、重要な部分は『満洲国グランドホテル』に引用しました。ベン・ブレークニーというアメリカ人の弁護士、梅津被告の弁護人ですね。武部は梅津関東軍司令官のもとで、トップの官僚でした。以下は、市ヶ谷の法廷での証言です。

ブレークニー「あなたが、満洲へ行った理由というのは、満洲国を健全

なる国家に、つくり上げる目的のためであるということを書いておりました。この満洲国を健全な国家につくり上げるといふには、その国の民衆の生活状態の安定、または向上が必要であつたではありませんか」

ブレークニー「弁護人はなかなか面白い質問をするなと思います。それに対して武部は「(民衆の生活状態の安定、向上は)必要であります。私は満洲国の状態は、逐年向上しておつた、こういうふうに思います」と答える。自分の満洲国総務長官在職中に、教育の普及であるとか、衛生状態であるとか、農民の生活であるとか、医療であるとかが「相当よくなったことを認めますが、私が自分で誇るつもりは何もございません」。これが武部の市ヶ谷での言葉でした。武部六蔵は、そういう最小限の自負を、東京裁判という公の場で言い残せたのは、この人にとってはよかったのではないかというふうに僕は思いました。その発言を『満洲国グランドホテル』の中で引用できたのは、意味があることだったんじゃないかなとも

思っています。関東軍と大喧嘩をして満洲国を去った大達茂雄にも触れたいのですが、こちらは省略します。大達も僕の大好きな登場人物です。

軍人ですと、植田謙吉という人に注目しました。植田関東軍司令官はノモンハン事件の責任者で、責任を取らされた将軍です。週刊誌的な話題で言うと、当時「童貞将軍」と言われていて、一生、結婚しなかったんですね。軍人として後顧の憂いがあっちゃいけないと家族を持たなかった。昭和七(一九三二)年の第一次上海事変の時に、この人は軍人として有名になった。ノモンハンでは敗軍の将ですけれど、その敗軍の将として帰ってきた時に、宮中から車が出るのですけれども、植田大將は車を断っています。陛下が出して下さった車を断るとは、よほどのことです。そのエピソードを僕は、当時の陸軍次官の山脇正隆が『秘録 板垣征四郎』の中で書いているのを読んで、そこから植田謙吉という陸軍大將に興味を持って、調べ始めた。そうすると、この人は、キャラクターとして非常に

面白い。一方では辻政信のような非常に問題ある人物を重用してもいる。

で、そういう問題も後になって、前田啓介さんという読売新聞の記者が書いた『辻政信の真実』（小学館新書）を読んでわかったのですが、辻政信は戦後も植田謙吉と親しくしていて、辻の息子の結婚式の主賓として植田謙吉を呼んだりと、関係がずっと続いてたりするんですね。『満洲国グランドホテル』では、「忠臣」植田謙吉はソ連飛行基地空襲を除いては、大命に従っていたのではないかと、通説とは違う意見を書きました。

内村剛介にだけ触れて、おしまいにします。読んでくれた方の何人もが、内村剛介の発言に注目してくださいました。内村剛介という人は、戦後の歴史観で満洲国を見てしまうのは必ずしも正しい見方ではないんじゃないかというのを、相当戦闘的に、挑発的に言っているんですね。それは月刊『文藝春秋』の激突座談会という場で、昭和五十八（一九八三）年九月号の座談会「日本人にとって「満洲」とは何

か」での発言です。座談会に出席した石堂清倫、澤地久枝とかを相手に戦闘的に言ってる。これはある意味で大きな問題提起で、僕はこの問題提起はある程度受け止めなくちゃいけないかなと思ったので、本の中では意識的に大きく取り上げています。

内村は別に戦後の日本がいいとは思ってない人ですし、戦争中の日本もいいとは思ってない人ですけども、

今まで見られてきていた満洲国の歴史であったり、あるいは日本の近代史というものを、どういうふうに見直すべきか、示唆に富む刺激的な発言を重ねています。「日本人がすべて悪いという満洲史観には同意できません。きのうは勝者満鉄・関東軍に寄食し、きょうは勝者連合軍にとりついて敗者の日本をたたくというお利口さんぶりを私は見飽きました。そして心からそれを軽蔑する。われわれの先輩、たとえば初代満鉄総裁の後藤新平の企図は公平に評価されるべきだと思う。文治主義的で平和にやっていけば、満洲での五十万ないし六十万の日本人の移民が可

能だというのが彼の考えだった」というのが内村の意見です。内村はさらに続けて言いました。「満洲が他国かどうか、ぼくには疑問がある。あれ（満洲）はノーマンズ・ランド（無主の地）だったということも明らかです」。まだ紹介したい人はたくさんいるのですが、今日はここまでとします。

（2023年7月18日・公開講演会）

筆者略歴（ひらやま・しゅうきち）

1952年東京都生まれ。雑文家。慶應義塾大学文学部国文科卒業。著書に『昭和天皇「よもの海」の謎』（新潮選書）、『戦争画リターンズ——藤田嗣治とアッツ島の花々』（芸術新聞社、雑学大賞出版社賞）、『江藤淳は甦える』（新潮社、小林秀雄賞）、『満洲国グランドホテル』（芸術新聞社、司馬遼太郎賞）、『小津安二郎』（新潮社）がある。近著に昭和史の読書ガイド『昭和史百冊』（草思社）がある。

公開講演会記録

人間 聖徳太子 リーダーシップの神髄

——和を以て貴しと為す

四天王寺39代現当主、雅楽師 高谷秀司



一 はじめに

令和5年1月18日、国際善隣協会の講演会で新年行事として、私は「雅の世界―和を以て貴しと為す」の語りと和琴演奏を、披露させていただきました。その時の企画者からの予告は、次のようでありました。

「世界がグローバル化した現代、商品やサービスそして情報さえもが寡占化している。その底流をなしているのは経済的な競争による序列化。結果、地球温暖化などの世界的な危機がもはや顕在化している。重要なことは持続可

能性。そのために日本の精神的な文化や伝統は、世界へ普遍化できないだろうか。講師の高谷秀司氏は、世界に公演旅行し、伝統的な日本人の心情や心根を、芸術と文化として表現してきた。日本人自身もそのことを学ぶ必要があると考え、講演企画を行った。令和5年の年始め、国際善隣協会の講演会のテーマとして、日本と隣国諸国との相互関係を深めるために、「雅の世界―和を以て貴しと為す」という表題にのせて、和文文化情報を誦い・舞い・囃していただく。同時にベトナムでの日本企業向けの就業教育の実践についての最

新の取り組みについても紹介していただく。日本が主導すべき善隣交流への参考となるのではと、参加を薦めたい」。

当日、講演者の私は、和琴を肩に持ち爪弾き、私の常套の演じ方である吟唱と会場の方々への問いかけを行い、新しい年の平和を相歌いたしました。その精神は、表題にもある聖徳太子の「和を以て貴しと為す」についての問いかけとも通じるものだろうと考えました。その演述を、紙面で表現するために次のように再構成して概括することになりました。本文は、その内容を記述していますが、同時にそれは特徴で

もあるでしょう。

(一) 歴史考証を重ねる中で、客観的なエビデンスをもとにし、事実を編み上げていくプロセスを踏まえて真実を発見しようと試みる。

(二) (一)の根拠として、原文や古文書の解説を基本とする。

(三) 現実生活の中で、会や組織などの経営に活かしていくために、例としては、平易で日常的な話を論中に取り入れる。

二人間、聖徳太子

① 逸話

私は、大阪の八尾市太子堂で生まれた。言わずと知れた聖徳太子に由縁のある地で、ここで産声をあげた。祖父の実家でもあります。こうして、「人間聖徳太子」を語るには、立場上どうしても個人的なことからはじめなければなりません。しかも、大阪弁での記述であることを、お許し願いたい。

私が小学校へあがる前に、祖父は、家のすぐそばにある勝軍寺（註27ページ参照）に、聖徳太子全妃の記念会館

を建立するのに、躍起になって奔走していました。

「ヒデちゃんなあ、ほんなもんわれなあ、ほんなもん。われえ。ほんなもんわれなあ、太子さんもなあ、ほんなもんわれ：毒盛られてなあ：。ほんなもんわれなあ：。太子様もなあ：。ほんなもんわれえ：（これを1時間以上、聴かされているのである：）」

【大阪弁の翻訳】

ほんなもん（われえ）↓一人称の前につく付帯表現。意味は、あまりない。強いて言うなら、理屈は抜きにしてくらのニュアンス。あるいは、世の中というものは、といってもよいかと。われ↓一人称、英語でいうI、しかし、Youでもある。

私Ⅱあなた、あなたⅡ私。自分と他者の共有性にこそ、大和言葉の精神性の神髄がある。他人であって他人でない。自己であって自己でない。でも、自己でも他人でもある。この自他共有感の中に情緒感のある共同体精神が育まれていると実感している。

ほんなもん、われえ：だけで、1時

間以上、すごい、としか言いようがない空間、空気。

ほんなもんわれえ：以外の言葉は、聖徳太子、太子様、そして、毒、毒盛られてなあ：。

酔いにまかせて祖父のボルテージが最高潮に達した時「ヒデちゃん、ちょっと待ときや」と言って土蔵から絵を持ってきた。

太子様、太子様の側室（後述する3人目の側室）、御子。3人が、なんと、口から血を吐いて倒れている絵。祖父はただ見ただけで何も語らなかった。私は、あまりの衝撃に泣きだした。悲しいのではない。泣けてきて泣けてきて、涙がとまらない。そう、哀しいのだ。いや、愛しいのだ。この時のことが、忘れられず今も、生きている。まさしく、聖徳太子毒殺の絵。

面白おかしく述べるつもりは毛頭ない。この絵は、祖父が積年の想いで創った聖徳太子全妃の記念会館の中にある。公開なんかされない。閉ざされたまま。鍵のかかったまま、勝軍寺のご住職に頼んで聞いても、口を閉ざしたまま。

どうということなんだ。意味がわからな
い。正式に依頼もしたが、今はお答え
できない、開扉できない、の一点張り。
聖徳太子が教科書からなくなるこの時
代、これから、解き明かしていかなば
ならない。

毒殺？ 何やらキナ臭い（一般的に
は、当時の疫病、天然痘で死んだとさ
れている）。毒殺というからには必ず
理由がある。なぜだ。

② 人間聖徳太子の実像

人間聖徳太子、恋もした。たくさん
の恋もした。聖徳太子には、4人の側
室がいた。一人目は、菟道貝蛸（推古
天皇と敏達天皇との間の長女）。二人
目は、蘇我刀自古野郎女（蘇我馬子の
娘にあたり、母は物部氏。兄が、蘇我
蝦夷。太子との間にできた長子が山背
大兄王で、後の皇位継承者の一人であ
る）。三人目は、膳部菩岐々美郎女。
聖徳太子の一番愛した女性。4人の奥
さんの中では、最も身分が低い。この妃
は病に倒れ、太子が亡くなる前日に息
を引き取っている。四人目は、橘大

郎女（推古天皇の孫娘）。太子からす
れば叔母の孫。推古天皇の長女に子ど
もができなかったので、孫娘を妃に送り、
なんとしても自分の血を継ぐ皇位継承
者をつくりたかった（図1参照）。

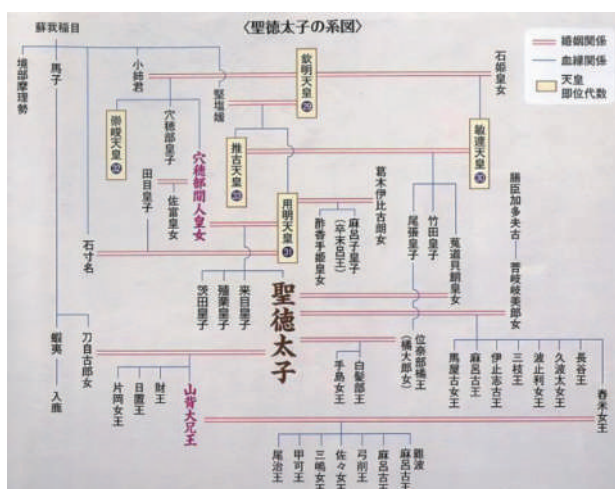


図1 聖徳太子の系図

ご存知のとおり、推古天皇は、大臣
を務める蘇我馬子と、信頼する聖徳太
子の協力を得て、政治改革を推進した。
その中で馬子は、次第に権勢を振るっ
てきた。太子の徳と能力の萌芽により、
思いのままにならなくなってきたので

馬子は太子を消すことを思いつく。こ
こに娘の嫉妬が重なる。父と娘の感情
が見事に重なった。つまり、前述のよ
うに太子の二人目の側室は、三人目の
側室 膳部菩岐々美郎女にうつつを抜
かす太子を憎悪した。最初は彼女への
嫉妬くらいであったが、この嫉妬が、
やっかいで怖い。女の女に対する嫉妬
の極みが、夫に対する憎悪に転換する。
ましてや、身分の低い相手に寝とられ
るなんて言語道断。娘の憎悪と、父の
恨みが重なり、太子に毒を盛る。あっ
てはならないことがおこる。毒を盛る
のは、すぐ側にいる人しかできない。
実行犯は、太子の二人目の側室、蘇我
馬子の娘、蘇我刀自古野郎女。少しず
つ、少しずつ毒を盛り、最後の一服で
しとめる。指図は父。

あの絵の意味は、『伊勢物語』の
「筒井筒」に他ならない。『伊勢物語』
の作者の真偽はさておいても、在原業
平は、この史実をもとに展開している
と確信する。

③ 伊勢物語の引用と解釈

そのくだりを、「筒井筒」（第23段）

から引用して示す。

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとにいであそびけるを、大人になりにければ、男も女も恥ぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつゝ、親のあはすれども、聞かでなむありける。さて、この隣の男のもとよりかくなむ。

筒井筒 井筒にかけし まろがたけ過ぎにけらしな 妹見ざるまに ①

—この歌は二人目の側室の作で、この返歌をうたう女こそライバルの女、三人目の側室である。

女、返し、

くらべこし 振分髪も 肩すぎぬ 君ならずして 誰かあぐべき ②

—高安の郡のいる新しい女が、三人目の側室。筒井筒の段前半では、元の女の純心さにほだされて、一度は、太子も、つぎを詠む。

などいひいひて、つひに本意のごとくあひにけり。

さて、年ごろ経るほどに、女親なく、たよりなくなるまゝに、もろともに

いふかひなくて あらむやはとて 河内の国、高安の郡に、いきかよふ所出できにけり。さりけれど、このもとの女、悪しと思へるけしきもなくで、出しやりければ、男、こと心ありてかゝるにやあらむと思ひうたがひて、前栽の中にかくれるて、河内へいぬる顔にて見れば、この女、いとう化粧じて、うちながめて、

風吹けば 沖つ白浪 たつた山 夜半にや 君がひとりこゆらむ ③

とよみけるをきゝて、限りなくかなしと思ひて、河内へも行かずなりにけり。

【現代語への翻訳】

訳① 幼なじみで一緒に遊んで、背くらべをした井戸の縁の高さにも足りなかった自分の背丈が伸びましたよ。あなたに会わない間に、大人になりました。あなたをむかえられますよ。：結婚できますよ。

訳② 貴方と背を同じように比べてきたふり分け髪も肩を過ぎましたよ。女として、貴方に：そう、貴方以外に誰が私の髪を結いあげましょうか。あなた以外におりませんわよ。

訳③ 風が吹くと沖の白波たった山、夜半には君がひとり越ゆらん、嗚呼、あなたは、あんなに、大変な所を、一人で越えてゆかれるのでしょうか、心配でたまりません：あなたのお気をつけて。

—この男限りなく悲しと想いて、いや、この主人、業平も改心する。この男Ⅱ業平、いや太子であり、太子は、限りなくいとおしいと想って浮気をいったんはやめる。しかし、激情は抑えられない。三人目の女へと走る。

業平は、実にお見事。太子が、毒殺であつたかどうかを問題にしているわけではない。恋多き太子が好きなのだ。人間臭い太子が好きなのだ。

さまざまな「才気」を取り沙汰される太子だが。人間聖徳太子そのものが偉大なのだ。

三 太子のリーダーシップ論

① 太子曰く

場面は一転するが、そんな太子の実務での業績について触れてみたい。まず、その一つとして、太子が、外国からの日本への見方を変えたことについて。

当時は、「倭」と呼ばれていた日本。倭とは日本を見下げた考え方、使い方であった。『魏志倭人伝』『漢委奴国王』にあるように、今風の和ではなく倭という文字で記載されている。しかし、この考え方を、根底から転換させたのは太子の偉大な業績である。まさしく、「倭を以て貴しと為す」からの「和を以て貴しと為す」への転換である。

そして、もう一つは、リーダーシップの捉え方である。太子の古文書を読んでいると、太子がこのリーダーシップそのものを定義していると気づく。現代語で平たく表現すると、太子曰く、「リーダーシップとは、一部の人が、他の多くの人々に影響を及ぼす現象」。働きかける側に着眼するのではなく、現象そのものが、リーダーシップである、と言い切っているところがすごい。単なる強権発動や、アメとムチでもなく、現象自体がリーダーシップ。つまり、働きかける側にしてみれば、多様性があるべきだと言いはなっている。多様であるからこそ、現象が、リーダーシップとなる。この根幹

の思想が、後に、冠位十二階や、憲法十七条を生み出していると、解釈できる。そして、さらに偉大なことは、リーダーシップをタイプ分けしていることである。

今までの聖徳太子研究で触れられることはなかったが、私は祖父の関係で、それに関する古文書に触れる機会があった。以下に現代語訳を示す。

世の、組織のリーダーである以上、頭である以上、必ず関心を持つものが二つある。まず、一つは、成果（＝業績と言ってもよい）である。現代の会社で言えば、売上げ、粗利、利益率、成約率など…。組織が、学校の部活であれば勝利（＝成果）。社長であつても部長であつても、これに関心のない人はいない。関心を持たないと会社は必ずつぶれる。

太子曰く、「成果ありて徳あり、徳ありて成果あり」。

これは、普通、順番が逆じゃないかと感じないだろうか。ならべかえてみる。「徳ありて成果あり、成果ありて徳あり」。

この方が合点がいく。しかし、太子は、前述どおりであり、ゆえにここに、真の徳を解く鍵がある。

さて、リーダーが、必ず、関心を持つもの、もう一つは、メンバーとの人間関係（＝メンバーとの人間関係に対する促進行動）である。この二つ、成果と人間関係が、バランスの軸となる。

例えば、営業部長が、「売れ売れ、はよう売らんか、座ってってなんぼとちゃうやろ、コラ！」なんてやっていると…部長自身も本音として、「部下たちはここまで言ってしまった俺のことどう思ってるのだろうか、大丈夫だろうか、へそ曲げてないかなあ、など、など…」について、気になるし、心配にもなる…。しかし、ちゃんと売れと、きつく言わないと売らないvs.言うと俺を悪く思う。

太子曰く、「心の揺れ、揺れの理」。現代語で言うところ、シーソーの理論と、

言えばよいだろうか。成果か、人間関係か…。ギッコン、バツタン、ギッコン、バツタン。まさしく、人間らしい。太子は、まさしく、人間を人間とし

て、人間味のある人間として捉えた人なのである。人は、つねに揺れているし、揺れるから人間であるし、揺れるからこそ成長する。

太子曰く、「人の揺れは成長である。人が、「この揺れを成長につなぐ」。それが、「人が人為る由縁である」。

② 図式表示

太子は、この揺れ、すなわち、成果と人間関係の均衡を見事に整理している。古文書記載の太子の言葉どおりに図示する。

この図のように どちらにどのような傾いているかによって、そのリーダーの揺れの傾きが具体的に

見えてくる。

太子曰く、

「典型を悟り、正しきに至る」。

つまり、特

徴的なパターンを把握して、リーダーシッ

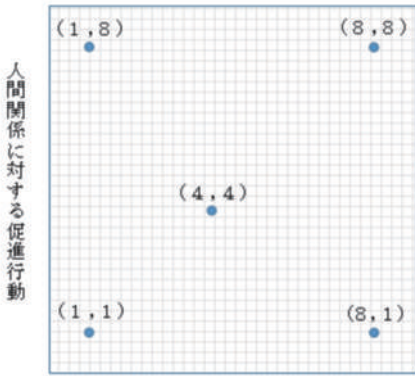


図2 成果と人間関係の座標表示
5種類へのタイプ分けとその座標点

プの神髄を体得する。

まず、この図、ミニマムを1にして、マキシマムを8にしている。8は、当時、最多をあらわすシンボリックな指標であったと思われる。太子は5つのパターンに分けている。

まず、典型の最初として、**座標点**

(1, 8)のタイプ。人間関係に対する促進行動が8、成果に対する促進行動が1。このタイプは、はっきりともの言えない。いつもニコニコとはしている。太子曰く、「嫌われざるを第一義とする」。

つまり、嫌われたくない、を第一とするタイプ。もちろん、人として生まれた以上、嫌われたくないというのは、当然。そして、自然な心理。いついかなる時も、嫌われたくないを第一とする。

しかし、この第一が問題。いついかなる時も嫌われたくないが第一になる。会社というなら部下が不正をしなくても言わない、言えない。

適当に言ったようにしながらお茶を濁す。見て見ぬふりして言わない。言えない。こういうリーダーは、人あたりはいいいけれど：煮えかえらん（ニコニコしながら、ポーンと肩をたたく。「ニコポン」タイプ）。

次にその対極としての**座標点**(8, 1)のタイプ。成果に対する促進行動は、マックス、人間関係に対する促進行動はミニマム。業績至上主義。営業できないのは、人間ではない。闘いに勝てない人間は存在価値なし。

こういう人、こういうタイプは、いつも、イライラしている。常に高圧的、威圧感バリバリ。そっくり返って歩く。机を叩いてる。部下に 罵詈雑言を浴びせかける。できるSEもこのタイプ（考え方、部下、メンバーになめられたらおしまい）。

このタイプが多いのは、冷ややかに見ながら、できない部下を小馬鹿にしている。

このタイプが厄介なのは、いざとなると一人でやり切ってしまうから始末に負えない。

太子曰く、「馬子はこの楚にて」と、

記している。

蘇我馬子はこの典型だという認識。

推古天皇もこのタイプから成長したと推察される。即位時は典型的な（8、1）のタイプ。

次に、真ん中。成果と人間関係のどちらも（4、4）のタイプ。このタイプは、バランスはとれている。

バランスが崩れたらおしまい。ひと昔前の公務員。メンバーから新しい提案、それも、革新的な提案があると：必ず口癖。「前例はあるか、過去の例は、あったらその例はうまくいったか」などとのたまう。均衡をとりすぎて新しい展開に耳を貸すことすらできない。現状維持。ホドホド、厳しい選別の時代においては、現状を維持していくと、後退していく。

太子曰く、「このタイプ、時として、あまたいるべし」と。

さて、次に、成果、人間関係、両方とも、どちらにも関心がなく、価値もおいていない**座標点（1、1）のタイプ**。何に関心があるのか、ただ一つ、自分、自らの身を守ること。保身、こ

れだけ。

会社の中間管理職でいうと、このタイプでも、部下には、それなりのことを言う。例えば、売れなかった月、ポーズ〇〇（売上げ〇〇の営業社員）に「営業は、売ってなんぼやろ、売ってこんかい、ボケ」とどなる、がなる。しかし、その声のスタンスは、：と部長が言っていたよ、部長が言ってるよ、と。

敏感な部下は、それを感じ取る。どうせ言わされてるだけだ。今度は、部長から報告を求められると、「いや、あの、部長、現場もいろいろありまして、あの、上客A社も倒産しましたし、あのいやあ、：。それに、市場環境が：いやあ：である。私が言っているのではなくて：あの、いや、課員が言うんですけど。上が言ってる、下が言ってるを、切札にするタイプ。延々と続く。このタイプに思いはない。もちろん想いもない。ましてや、念いはない。課長とは名ばかりで、部下から見ればクソ。単なる連絡係。窓際どころか、枠の外。ペランダ族。「自らの身が守られなければおしまい」。トロトロ。

そこで、我々が目指すのは、**座標点**

（8、8）。

太子曰く、「同じ志のもとに心を一にして進む」。

一言でいうなら共通目標の統合がくずれたらおしまい。共通目標の統合のために、鬼も仏にもなれる。例えてみると、プロ野球の星野仙一監督、中日の時は、座標点（8、1）。ただただ、ベンチのものをあたりかまわず蹴り倒し、選手をなぐる監督。結果としては、勝てなかった。

重要なことは、リーダーとして成果に重きを置くことと、実際に成果が出ることとは、別問題。阪神の星野は、別問題。人間関係という意味では、選手の間にも大切にした。まさしく、鬼にも、仏にもなるリーダー。

そして、太子曰く、「人間には、相性というもの、合う合わないは、ある」。

しかし、共通目標は、相性を乗り越える、共通目標と統合していくことは、人と人との相性を超えて、人どうしが、力を超えていけるきっかけであり、機会であり、プロセスであり、結果であ

る。つまり、共通目標を統合して、それを構成しようとするプロセスに「和」が生まれる。この「和」こそ、和を以て貴しと為すの「和」である。

③ 具体例

街角で、ラーメン屋に入る。挨拶、そう、いらっしやいませの挨拶のない店がある。仕方がないから中に入る。待ってても、誰も来ないから、「メニューありますか」って聞くと、ぶっきらぼうに、メニューを投げつけてくる。大げさではない…まさしく、頼もうとして、八宝菜と…とラーメン。と…と…と言ったら、もういない。

本当は、ぎょうざも春巻も、頼みたかった。おまけに、水も来ない。「水…」というと、不愛想にコップを机にたたきつけてくる。ラーメンができた、と思うと、片手で、できたてのラーメンの丼をいやそうに、よそよそしく、また、机にたたきつけて、その熱さからのがれるように手を遠ざける。まるで、汚いものを置き捨てるように。すでに食べる気すらなくなってしまう。二度

と行かない。

ところが、同じような街角、一緒にの間の間口、ほぼ同じ大きさの店、なのに、入った瞬間から違う。「いらっしやいませ」。心地よい挨拶がこだまする。店の空気が違う。温かさが伝わってくる。笑顔、そう、喜色満面の笑顔で迎え入れられ、自然体で、ずっとメニューが出てくる。チャーシュー麺と春巻とギョーザ、それからザーサイ、それと…受け答えもすがすがしい。子ども連れで行くと、注文したすぐあとに、小さい、何かキャラの入ったおわん、そして、先の丸まったフォーク。「…」。ラーメンを持つてくる時も、ラーメンの器を持つ手が違う。真心のこもった手遣い、指遣い。お届けするまで愛を込める。「さぁー来た」「フーフーして食べようね、ほら、フーフー、ほら」「おいしいね、おいしいね、ほら」「また、来ようね」「うん」。

同じような街角、同じくらいの店の大きさ、間口…なのに、何が、こんなに大きな違いを生むのか、なぜこんなに違うのか、答えは簡単。店のおやじが違う

です。おやじのリーダーの考え（哲学）が違う。「お客様にラーメンを食べてもらうということとはな」「お客様に喜んでもらうということとはな」「お客様にラーメンを食べて満足してもらうということとはな」「お客様に本当の笑顔をいただくということとはな」…。

店の従業員、バイト、店に関わるすべての人に、ことあるごとに、くり返して、くり返して、共通目標として共有化して、信念になるまで体感させ、行動レベルに落とし込んでいく人、そして、共通目標（真の顧客満足）を共有化、達成化するために、鬼にも、仏にもなれる人。こういう店のおやじが、従業員、店に働く人、一人一人の意識を、店の組織風土を変える。

四 まとめ

以上は、まさしく太子の言う「和を以て貴しと為す」の例となる。太子は、自らの身を以て、この哲学を体現していた。大いなる影響力を持って、大和の国に、現象として体現してきたのである。さまざまな施策を立案し施しな

がら、大和の国としての共通目標を打ち立ててきた。日本の歴史上、いや世界の歴史上、稀有な存在である。

施策の中でも、冠位十二階は、適材適所を見事に現実化した国の民とともに歩む不世出の行政政策。人の長所を活かす国政。その根幹を貫いているのは、憲法十七条の第九条：

「信は道義の根本である。すべてのことに、信がなければならぬ。事の善悪、成否を分ける要点は、必ず信にある。群臣ともに信があれば、何事であれ成就しないことはなく、群臣に信がなければ、すべてのことはことごとく失敗するであろう」。

人を信じ抜いて活かす。この「信」を創出する源が、共通目標。その共有化と達成意識。これらのつづれ織が、信を連鎖、共鳴させていく。国内の政治の中で、この「信」に基づき、「和を以て貴しと為す」を定着していく過程で、国内の政治力、親和力の充実に示しながら、それを事実で示した。「倭」は当時、外隣からは見下げられてきた表現であった。

その倭を外隣向けに、真の意味での内政を充実させて外交を達成させていくというまさしく、隣を善と見なし、隣とともに善をなす。その結果、自らの国、大和も認めていただく。つまり、「倭を以て貴しと為す」「和を以て貴しと為す」。こうして、二つは、同義語、全く同じ意味となったのである。ここに太子の真髓がある。内政Ⅱ外交をものの見事に実現してみせたのである。聖徳太子の存在なくして、大和の国はなかった。日本の国もなかった。と言っても過言ではない。

昨年は、聖徳太子の千四百回忌にあたり、百年に一度の大法会が行われている。各地でその遺徳が偲ばれる太子は、古代史上最も重要かつ卓越した人物であったと考えるが、『日本書紀』や伝記のなかで半ば神格化されており、その多くの業績やエピソードは、「太子信仰」を形成する要素となっている。太子の偉大なる精神と行動の足跡の中で、生きながらえている私の魂を、我々の生命を後生に綿々と継承していくのが、先に生きてきた者の使命であ

る。筆者は上述の大法会の最終日に幸若舞「和」を奉納させていただいた。人間、聖徳太子に、あらためて崇敬の念を表して、本稿を閉じます。

【註】

棕樹山大聖勝軍寺

太子が、物部守屋を滅ぼすために、信貴山の毘沙門天に祈願し四天王をまつり、その加護により戦いに勝ったので、この寺を建てた。所在地は八尾市太子堂三丁目三十一十六。本尊は如意輪観音（府指定有形文化財）。建立は飛鳥時代。

（2023年1月18日・公開講演会）

筆者略歴（たかたに・ひでし）

日本を代表するブルース・ギタリスト。琴奏者・作曲家、教育者。実は、聖徳太子建立の日本最古の官寺、四天王寺39代目現当主。1956年大阪生まれ、東京教育大学卒業（国語国文学専攻）。1985年に渡米後、ジャズ・ギタリストのラリー・カールトンやジャズ・ピアニストのデューク・ジョーダンらと共演。

ようよう 陶々俳壇

会句陶
結果
2023年7月

兼題 「貰う」

馬場由紀子

間仕切を簾に変へて涼をとる

伊藤正堂

◎紅朽

平安時代から千年続く日本の工芸「簾」。

障子戸を簾戸（すだ）に変えろと庭の緑が透けて見えと室内を涼しくする。夏の季節への変わり目、和風の庭と和風建物の景を連想させ日本の夏を描いている。現代は網戸やカーテンに代わり冷房が普及し姿を消しつつある。

◎善一

簾に変えて涼をとる。夏らしい心情である。

◎明良

酷暑の候、簾で風を呼ぶ住まいが羨ましい。道路の照り返しが厳しい我が家は、締め切った冷房だよりです。

真夜中や猫が爪研ぐ青簾

◎二三四

夏支度として青竹で編んだ簾を掛けたのだろ。まだ新しいその簾で、愛猫がカリカリと爪を研ぐ。ああ、と思いつつ怒れない、といったところでしょうか。なんとなく可笑しめがあります。

◎善一

晴れ渡る丘の馬鈴薯花ざかり

大内善一

◎正子

空との境界まで花が咲く見渡す限りのジャガイモ畑。

◎二三四

北海道の広大なじゃがいも畑をイメージしました。技巧に走らず景をそのまま詠んだことで、土の上の清楚な花と広々とした空間、花の白と青空といった対比が際立っているように思えます。「じゃがいも」ではなく「馬鈴薯」としたところも見事です。

◎正堂

風薫る野点の席に留学生

◎二三四

誰に誘われたのか、日本人でもなかなか足を運ぶ機会がない野点の席に留学生がいる。日本語の説明を真剣に聞いている様、見よう見まねで茶碗を回すこたない動作まで浮かんできます。季語「風薫る」の爽やかさに留学生のフレッシュさがよく調和した情景と、そこに着目した視点がすばらしい。留学生に幸あらんことを。

◎紅朽

留学生に日本のことを理解してもらうためにも日本側のさらなる努力が必要でしょう。

◎正堂

◎由紀子

日本文化に触れる留学生。好印象を持ってほしいものだ。

鯉跳ねて静けさ破る菖蒲池

橋本紅朽

◎正堂

夏の静かな菖蒲池に突然鯉が跳ねて静寂を破った。

◎明良

◎正子

有名な句が鯉に替わっていますが。

夏暖簾くぐりて入る露天風呂

◎二三四

温泉旅館でしょうか。露天風呂の入口に掛けられた暖簾が夏向きの生地、色柄に替えられている。女将が主人の細やかで粋な気配りに、露天風呂を流れる空気も爽やかになりそうです。

銀翼に乗って近づく夏休み

松島二三四

◎明良

孫たちが夏休みとともに訪ねてくれるのでしよう、遠路ははるばる飛行機で来るのですね。詠み人に縁のない夏休みが至近なものになるでしょう。

◎由紀子

目的地についてからが本当の夏休み。夏休みのワクワク感がうまく表現されている。

ママチャリに子らも荷物も梅雨晴間

〃

◎明良

子育ての忙しい母親の日常がよく表現されています。

◎正子

ルール違反？と思っても、そのバイタリティに圧倒されます。

◎善一

読経の間蛙和したり雨上がり

日野正子

◎明良

夕立の気配が読経と蛙ともにつまぐ表現されています。

◎紅朽

童話の一節のよつなユーモラスな景。故人も和んでいることでしょう。

◎二三四

夜更けて八重の梔子濃く香り

〃

◎紅朽

猛暑来て貰いし鰻膳の上

瀬崎明良

◎正子

ビタミンA（抵抗力を高める）とB1（疲労回復によい）の豊富な鰻を食べて、猛暑を元気に乗り切ってください。

梅雨明けや貰いものにて膳ゆたか

〃

◎正子

くださった人の顔も浮かび、食卓が賑やかになります。

翠蔭の山門不幸黙礼す

馬場由紀子

◎二三四

いままさに法要が営まれているらしき寺、山門は濃い緑に覆われている。そこへたまに通りかかった作者は、見知らぬ故人ながら黙礼して通り過ぎた。中七のリズムと措辞がもう少し整えば、このよい景も作者の気持ちもさらに伝わりそうにも思います。

貰ひ子の脅しも昔夕焼雲

〃

◎二三四

貰ひ子が誰かを脅した？ 貰ひ子を叱った？ ちょっとわかりづらいのですが、夕焼雲が広がる空の下、切ない思い出も懐かしさに変わるといつ心情には共感します。

ようよう
陶々俳壇会
句
陶
結
果
2023年8月

兼題 「返す」

馬場由紀子

水船の底より拾ふ冷や奴

伊藤正堂

◎二三四

豆腐屋の店頭の景と見ました。お豆腐屋さんの店内には、大きな水槽（水船と言つのですね）があり、当日早朝に作ったお豆腐がゆらめいているものでした。注文のたびにそこからおじさんがお豆腐を「拾って」、経木に包んでくれるのです。今日は冷奴で食べよう、「木綿一つおねがいします」「はいよ」やりとりまで聞こえてきます。

勝名乗り返す力士の肩に汗

◎正子

荒い息遣いまで聞こえてきそうです。「返す」が分かります。

満願の僧を囲みて冷し酒

大内善一

◎紅杓

法事では祈願を終えたと僧侶や参列者を招待し感謝の気持ちを示す会食を行うが、故人の思い出を語り偲ぶ場でもある。「精進落とし」とか「御斎（おとぎ）」とも呼ばれ、献杯が行われる。仏教では神道と異なり信者が守らねばならない五戒の中に禁酒が挙げられているが、般若湯とか言われ飲酒が許されているのは神仏習合の結果とも言われる。日本酒は燗をして飲むものだが夏は暑いので冷やのまま飲まれる場合も多い。

◎二三四

どんな願をかけた僧侶でしょうか。その期が明けた今日、関係者が集い酒を酌み交わします。冷やし酒が五臓六腑に浸み入るよう。

夏神楽無骨な腕見え隠れ

◎明良

夏祭りは嬉しい人々が盛り上げてくれますが、中には入れ墨も見え隠れです。

◎正子

見たことがないのですが、風情が伝わってきます。

ウォンウォンと竹藪奥の蟬時雨

日野正子

◎由紀子

「ウォンウォン」が効いていますね。藪深くで鳴いている、その響きを感じられます。竹藪奥の時間の流れが私たちの世界とは異なっているようです。

邪念断ち刀返して西瓜切る

◎明良

物騒な句ですが刀返す前の邪念はなんだったのか心配です。西瓜を見事に切られたことでしょう。

◎二三四

ここまで真剣に割ってもらえたら、西瓜も本望でしょう。

月島の路地鉢植えの鳳仙花

松島二三四

◎明良

下町の路地の様子が絵のように浮かびます。打ち水もされた石畳があるようです。

◎正子

路地の両側によく手入れされた鉢植えが並び、目を引くのが、ぱんと弾ける鳳仙花。

遊び女のしなだるごと凌霄花

◎明良

知らない世代ですがなんとなく色町の風情が凌霄花で漂っています。

◎正子

ご近所の凌霄花、綺麗と思いつつも違和感を覚えるのは、そつとことだったのかもかもしれません。

清きかな入道雲の隙間青

瀬崎明良

◎正堂

入道雲の隙間の青がべったりの雲の一部から望めるのがいかにも清らかに見えている。入道雲との取り合わせで見る空の青は美しい。

◎紅杓

◎由紀子

雲間に見る青空が好きです。雲がないより心惹かれます。ただ、入道雲は厚く、「隙

間」に少し違和感を持ちました。返しなき社会の不正暑き日々

◎正堂

●由紀子 「返しなき」が掴みきれませんでした。

生垣の外にこぼれて百日紅

橋本紅杓

◎正子

百日紅の花の特徴が「こぼれて」によく表現されています。

◎正堂

◎善一

空蟬や公園わきの石垣に

◎善一

●明良

夏の日の下であれほど騒がしかった蟬が突然落ちて生を終えるのは儚い。

残心を問ふや力まぬ空蟬に

馬場由紀子

◎善一

空蟬は魂がぬけて虚脱状態の身。新内節の中に「身は抜け殻の心地して」と歌われている。良い句である。

向日葵や素数の謎と戦争と

◎二三四

向日葵はウクライナの象徴。句全体では、唐突に始まり先が見えないウクライナ戦争と世界の、人間の不条理を詠んでいると解釈しました。「素数」により不可思議で、不条理さが際立ちます。

〈夏の終わりに〉

日本人の美意識の象徴として雪月花があげられます。俳諧においても大切に扱われる素材です。連句では花と月には定座が設けられていますし、雪も重んじられ一巻に多用されることはありません。

立秋となり暦の上では秋に入りました。まだまだ暑い日が続きますが、風の匂いに夏の終わりを感ずります。秋といえば「月」。自分だけの「月」を見つけて初秋・仲秋・晩秋のそれぞれの「月」を一句にしてみたいです。

中国

ウエッチング

編・訳 上松玲子

電子商取引と中国農村

商務部は、先日開かれた県域商業発展に関する記者会見で、農村振興において農村の電子商取引を重視、推進することを表明、運営能力強化、ブランド育成、物流の円滑化、サービスの最適化、変革推進など、各領域でのロードマップを明らかにした。

畑の新鮮な穫れたて野菜や果物が翌々日には食卓に並ぶ。産地名での商品検索はブームを越え習慣にもなっている。村の市場はもはや地元消費の

「主戦場」ではなく、村人の日常の消費ニーズは「村への速達便」で大半が満たされる。最近では「ネットですぐと稼ぎ」が流行、多くの農家が現場で生配信をしている。

わずか数年で急成長した農村の電子商取引は中国経済の明るい材料と言える。2009年には、村が淘宝アカウントを持つケースは国内に3例しかなかったが、2022年には7780例になった。農村部のネット通販売上高は2014年の1800億元から2022年には11倍の2兆1700億元に増加した。農産物全体でのネット通販売上高は5313億8千万元に達し、前年比9・2%増加した。

急速に発展した電子商取引は、農村住民の日常にも根付いた。携帯電話の画面をクリックすれば、ほしいものが数日で到着する。電子商取引と物流などのインフラ改善が時間

と空間の制限を打ち破り、高品質で低コストの商品を手軽に購入できるようになった。その結果、消費が喚起され、農村住民の物質的および精神的なニーズを満たすようになった。それは同時に農村消費の拡大とアップグレードを意味する。

農村の電子商取引はエコシステムにも組み込まれつつある。農産品の物流、仕分け、生産工程が最適化、再構築され、より多くの資源が流通にまわり、旧来の農業が活力を得て、農民の収入アップと、地方経済活性化につながっている。さらには地元の特徴を生かし、文化や観光業の振興と結びつける動きもあり、農業の発展に新しい可能性が期待される。

農業の電子商取引は経済現象でありながら文化的な意味ももつ。多くの農村住民がインターネット経済とメディア

リテラシーの啓蒙を受け、スキルと知識、「ネットワーク感覚」や「理解」を手にした。彼らは今後、新しいデジタル分野でより自由に「歩く」ことができ、地方にいながら新しいチャンス、もしくは追い抜く機会を得たのだ。電子商取引により、地方の様相、農業開発の方式、農民自体が変わったのである。

『光明日報』2023年8月17日

誘拐事件の撲滅には

湖北省黃岡市は、公安部と湖北省公安厅の支援の下、2022年まで5年連続で誘拐事件解決実績の面で湖北省第一位となった。摘発した誘拐事件は54件、被害女性、被害児童88名を奪回し、70人の容疑者を逮捕した。41組の家族が再会を果たした。最も長いもので48年ぶりの再会であった。この背筋も凍る数字の一つ一つに胸をえぐる物語がある。

誘拐事件は、誘拐実行犯だけでなく、移送する者、売買する者などそれぞれが利益のために罪を犯す。それ故何かあれば互いにかばい、隠ぺいし、逃げる手助けをする。

こうした地下ネットワークの解明が誘拐撲滅の鍵といえる。顔認証、リアルタイムモニタリング、ビッグデータ分析などの技術は誘拐事件の解決と防止を支えている。DNA解析は親族関係の確定に大いに役立っている。

誘拐された児童を買った者はDNAという鉄壁の証拠の前では沈黙し、罪を認めざるを得ない。また、名前を変えて逃亡している誘拐犯も革新的科学技術の前では白旗をあげるしかないのだ。

『中国青年報（中文版）』2023年8月25日

特待だけ受けて

近年、西部のある省の学生がインターネットでこう不満

を書き込んだ。自分は「定向生」（卒業後は主に厳しい環境にある地方の職場に就職する契約を条件に入学する学生―記者註）の医学生で、違約金を払って就業契約を解除したいと希望しているが、当地の保健健康委員会から約束は守るようにと勧告されているというものだ。報道によれば、このような違約事案は珍しくないようだ。

この制度は元々人が集まらない経済的に立ち遅れた地域の人材確保のため、学費、寮費の減免や、生活補助金を支給するかわりに、入試前に求人機関の監督官庁と学生が就業契約を結ぶもので、同じ専攻の中で合格点数ラインもやや低めに設定されている。

したがって契約の不履行は信義にもとる上に、制度の不正利用が疑われ、他の志ある受験生の機会を奪うものになる。また、有形無形の社会資

源の無駄遣いにもなる。特に、医学、教育、農業技術などの分野での「定向生」を育成するには一定の時間もかかり、能力のある人材を必要だけ育て、待遇面を整えるのは、財政支出だけでなく地域をまたいだ連携など見えない努力があつてのことだ。

違約が起きぬよう、情報は透明に、規則は明確に、そして制度は公平であるべきだ。また、学生たちに社会の基層部（生産現場、病院、学校など民衆に近い階層―記者註）とは何かについて実例や体験を通じて学ばせ、基層部に身を投じる熱意を育てることも必要だ。

『経済日報』2023年8月28日

住宅ローンの負担軽減

8月31日、中央銀行と金融監督総局は連合で「住宅ローン金利変更に関わる通知」と「住宅費貸付政策調整に関わ

る通知」を發布した。これにより9月25日以降、条件を満たす住宅ローン残高保有者に限り、金融機関に対し金利の引き下げ変更や借り換えを申請できるようにする。

政策調整の主な点は二つ、頭金の比率の下限を住宅購入制限都市と非制限都市の区別なく、20%→30%とすること、二軒目の住宅ローン利率をLPR：プラス60ポイントから、プラス20ポイントに引き下げることだ。

業界関係者によれば、百万円を25年ローンで、利率5・1%で借りていた場合、仮に金利が4・3%になるとローン返済額は金利分年間5千円の減額となるという。これにより、ビジネスローンや消費者金融などの住宅金融への違法な参入を抑える効果も期待できるという。

『上海証券報』2023年9月1日



◆令和5年度第7回理事会の議題（10月19開催）

今月は下記内容で審議を行った。

・確認事項

9月21日に開催された第6回理事会の議事録（案）が確認された。

・決議事項

- ①新会員1名（大滝幸子氏）の入会が承認された
- ②太原植林事業視察旅行に対する旅費援助が承認された。

・報告事項

- ①「令和5年度中間決算報告書」の説明後、監事の監査報告が受理了承された。
- ②「将来検討委員会の提言説明会」および「長寿祝賀会」における会員の声について、意見交換を行った。
- ③委員会報告（定例報告）
- ④事務局報告

11月30日（木）に新会員歓迎

会を4年ぶりに開催する。

11月理事会終了後、当協会ビルの防災訓練を実施する。

（事務局長 竹前栄男）

会員だより

◎新会員

〈正会員〉

大滝幸子氏

同好会だより

〈俳句会〉

対面とオンラインでの俳句会を開催しています。

〈謡曲会〉

松木千俊先生のお稽古は一人ずつの個人指導です。

みんなの写真館

雪の大谷

（表紙）

今年4月に撮った立山黒部アルペンルートの「雪の大谷」です。立山黒部アルペンルートは標高3000m級の峰々が連なる北アルプスを貫く世界有数の山岳観光ルートです。総延長37・2km、最大高低差1975m。2台の専用の大型ブルドーザーで雄大な雪の壁を作り出すそうです。積雪によって、毎年の高さが違い、最高記録は1981年の23mだそうです。今年の高さは13mでした。毎年4月15日から6月25日まで、「立山黒部・雪の大谷フェスティバル」は室堂エリアを中心に開催されますが、いつも気が付いたら、シーズン外でした。風景を写真や映像ではなく、観光バスで巨大な雪の壁の間を通り抜ける夢がようやく実現しました。

（姜晋如）

植林事業訪中

（表4上）

北京市郊外蟒山国家森林公园にある「中日民間友誼林」記念碑。2000（2011）年に、当協会の八島継男先生が北京環境基金会等の団体と共に、小渕基金を利用し実施した植林事業を記念し、2008年に中国側が建てたもの。先日、当協会視察団が訪れた際の写真。右から、団員の岡部柊太、牛木久雄、姜晋如、侯麗娜（園長）、村田嘉明。

（村田嘉明）

中国の石碑に「八島継男」さんの氏名

（表4下）

「北京中日民間友誼林」記念碑の裏側を撮ったものです。記念碑の内容は後日に、別の文章にてお伝えします。赤い丸を付けた部分は、右から左へ順に「国際」、「善隣協会」、「八島継男」の文字を示しています。

（姜晋如）

2023年12月の行事予定

- 7日(木) 14:00 公開 第20回対面&オンライン講演会
「『周恩来の足跡』の翻訳・出版をめぐる」(仮題)
村田忠禧氏(横浜国立大学名誉教授、当会学術顧問)
- 12日(火) 14:00 謡曲会(松木千俊先生お稽古)
- 13日(水) 13:00 俳句会
兼題「幻」及び当季雑詠から5句を投句(11月末までに)
- 14日(木) 14:00 公開 第21回対面&オンライン講演会
「インドのビジネス機会と環境——進出日系企業の課題と事例」
中山幸英氏(ジェトロ企画部海外地域戦略主幹〔南西アジア〕)
河野将史氏(ジェトロ調査部主任〔南西アジア担当〕)
※12/14は、講師2名で前半、後半に分けて行います。
- 15日(金) 14:00 公開 【善隣中国塾】(対面のみ)
塾長:矢吹晋氏(横浜市立大学名誉教授、当会学術顧問)
- 22日(金) 14:00 公開 第22回対面&オンライン講演会
「留用について考察と体験」
新宅久夫氏(関東日中平和友好会会長、当会会員)

※12月29日から1月4日まで、事務局はお休みします。

12月の会議予定

5日(火) 13:00 国際交流委員会	13日(水) 16:00 東北委員会
11日(月) 14:30 講演委員会(Zoom)	21日(木) 13:00 理事会(第9回)
12日(火) 13:00 環境委員会	21日(木) 15:30 広報委員会

※下線は通常日程に変更あり。

【1月初めの講演会予定】

- 17日(水) 14:00 公開 第23回対面&オンライン講演会
「龍の世界」
池上正治氏(作家、翻訳家)

みんなの 写真館



INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)

<https://www.kokusaizenrin.com>